

支部創立六〇周年記念号

白門みえ

中央大学学員会
三重支部
<http://www.hakumon-mie.jp>

学員会三重支部 創立六〇周年を迎えて

昭和三六年卒

支部長 小川 益司

大学は平成二二年に創立二二五周年、三重支部は今年で六〇周年を迎えることになりました。

昨年田村前支部長、学員の皆さんから推挙を経て支部長に就任しました。

今年の六月名古屋で大学主催の東海支部の懇談会がありました。今日お越しの久野理事長ら大学、学員会幹部らと愛知、静岡、岐阜、三重、名古屋等七支部の支部長、幹事長が出席されていた。大学からは来年の創立二二五周年に向けて総合大学として更に発展させるための基本方針等を説明された。

特に二二五周年記念事業・募金を学員会（大学では卒業生を「学員」と呼んでいる）に依頼があった。現在一〇〇億円の目標額に対して半分の五〇億円に留まっているとのことであった。当三重支部に対しても一〇〇万円以上の寄付要請がありまして、私も取りまく経済情勢も極めて厳しい中でありますが、「世界に存在感のある大学」にするために学員のご協力をお願いします。

去る七月には四日市で本大学と父母連絡会との就職懇談会も開かれました。大学もきめ細やかな就職支援体制をしている印象を受けました。最近では新司法試験、公認会計士や公務員試験でも合格者は増加しています。二〇〇九年度の本大学入試志願者数も過去最高です。また外部からの評価も高くなっています。

しかし、反面伊勢路を舞台とする全日本大学駅伝や箱根駅伝等スポーツが低迷しているのは、かつての栄光を知る学員にとつては残念なことです。

三重支部も今年で六〇周年を迎えたこともあり、今年には大学との共催で本学商学部教授の斯波照雄さんを招いて公開講演会を開催することにしました。今後とも大学と連携しながら学員が青春の一時期学びの価値観を共有したというチームワークを良くして、学員同士の絆を強めていきたいと思っております。

宮武貴久恵 五〇周年 記念 絵画展

平成二二年八月一日～三日
三重県立美術館 県民ギャラリーにて



昭和四八年卒 宮武 貴久恵

子供のころ、大きな針葉樹林の一群の中に足を踏み入れたことがある。風雪や厳しい冷たさの中で生き格好は悪くても、毅然と天にそびえ立ち枝は、荒々しく折られても、悠然と存在を主張していた。

春の芽吹きを経て、短い間、濃緑の季節の色を見せるものの私には、静寂の中で、いつも光の届かない、黒の世界に映っていた。
ある日、行く手を阻む枝々を跳ね返

し、くぐり抜け、しばらく進むとそこは大きな花畑だった。
私は、花々の輝きに目を奪われ、思わず佇んだ。
子供のころ見た風が、原生林の中の花畑と重なり
ニューヨークで、「滲み出る光」の一連の作品となった。

昨年、私の生まれ故郷、倉敷での個展では、「とき放たれた光」は、廻り、多くものを照らし出した。

今、光は舞い戻り、ふたたび花に命を宿し、「ひかりを抱く花」となり、静かに、時の流れを待っている。

（絵画展のパンフレットに掲載されていた宮武さんの詩）

宮武さんは倉敷市で生まれ、津高、本学法・法を卒業し、ニューヨークで一四年前勉強され、二年前ベルリンの壁崩壊を記念した企画展に日本人唯一人招待され壁画を描く。今また絵画展の後、ドイツから招待されベルリンに行つて来られました。

期間中に「五〇周年記念絵画展祝賀会」もあり岡田卓也ご夫妻等多くの著名な方々がお祝い下さいました。今後一層のご活躍をご期待します。

学員会三重支部 創立六〇周年を迎えて

前支部長 田村憲司

学員会三重支部創立六〇周年を迎えるにあたり、「白門みえ六〇周年記念号」が発刊される事は、誠に意義深いことでもあります。

前支部長として私に一言寄稿せよとの事でありましたので、思いつくままに申し上げたいと思っております。

支部創立の経緯については、五〇周年記念号で既に述べておりますので、省略させていただきます。最近の大学の姿を私なりに若干申し上げたいと思っております。

私は、お茶の水の駿河台校舎で学びました。その後大学は多摩キャンパスに移つた訳であります。当時、周囲には日大・明治・共立女子大・東京電気大・東京医科歯科大等が在り、学びの環境はすばらしいところでありましたが、今は都心から遠く離れた場所

あり、情報の交換や、多種に亘る交流等が行なわれにくくなり、一時大学の人気下がった時代もありました。
しかしながら最近では、多摩地域も整備がすすめられ、不備な所も十分補完され、今では大学としての真価を十分高めております。

その実績の表れとして、各種国家資格試験で大きな成果を上げております。司法試験はもちろん、国家公務員、公認会計士等の資格試験合格率は、目を見張るものがあります。

また最近では、経団連・御手洗会長等政界・経済界にも飛躍しており、各界各層の指導者にもたくさん学員が頑張つております。

このような素晴らしい大学に成長した今日を見るのが出来るのも、長生きをさせて頂いたおかげだと感謝している次第であります。

以上私の大学への思いを述べ、創立六〇周年をお祝い申し上げます。

学員会の思い出

昭和三五年卒 森 伸生

中央大学と私との縁は、津高校の一年の時の担任が速水正先生（元支部長）であり、三年の時の担任が小出幸三先生であった。両先生はいずれも中央の法学部出身で、進路指導や社会科学の折などに、「これからは法学部を勉強することの必要性や法律を学ぶなら私学では中央大学がナンバーワンである」とことを常々聞かされていた。

私は自営業の跡取りであったので、本来なら経済学部や商学部へ進んで経営学を学ぶのがオーソドックスな進路選択であると思つてた。いくつかの大学に合格したが、両先生の影響もあって法学部に入学することになった。

在学中（昭和三一年四月～昭和三五年三月）の中央大学は全ての面で優秀であった。勉学面では司法試験・公認会計士試験では合格者が四年連続して全国一位であった。また、スポーツ面でも箱根駅伝連続優勝、東都大学野球リーグでは一部優勝、その他オリンピックにも金メダル獲得選手など多くの名

選手を輩出している。

当時、三重県から中央大学には約一〇〇名の学生が在籍していたが、中大三重県人会を結成して東京で情報交換や懇親会を定期的に開催して交流を深めた。私は在学中の二年間代表幹事を務め、三重県の先輩学員との交流会を持ちたいと考え、田村憲司先輩を訪ねて先輩と在学生の合同三重県人会を実現することができた。

その後、昭和三六年郷里に戻り私の仕事人生がスタートした。早速、学員会の諸先輩に挨拶にお伺いし学員会には積極的に参加した。当時身近にこの指導いただいたのが、早川和一（四日市市議会議員）、三輪喜代司（四日市市助役）、中野嘉四郎（鳥羽市市助役）、鈴木一夫（三重大学教授）、速水正（高校教諭）、田村憲司（日本土建社長）、など学員会のリーダーの面々であった。しばらくして、吉住慶之助（弁護士）、森豊純（朝日新聞社支局長）、中森勉（三重県議会議員）、丹羽英郎（丹羽商事社長）、各学員も熱心に学員会にご尽力頂いた。私は当時、学員会幹事長として事務的な業務を担当し、その後、赤塚高之（現副支部長）氏に事務局をお願いした。

平成四年三月発行の学員会名簿によれば、当時三重県下に四つの支部が存在していた。熊野支部、南勢支部、泉支部、百五銀行支部である。その後、四日市支部が独自に会合を持ち、発表会も出席したが、過去一〇年程開催されていなかったことであり、残念に思っている。南勢支部の方々には一月の大学駅伝で毎年お世話になってい

る。父母連絡会とも連携しながらゴールの伊勢神宮内宮前で選手を出迎え、歓迎会を開催している。泉支部は六〇名の学員を擁する一大勢力を誇り、県行政の重要ポストを多くの学員が担っている。また、百五銀行支部も近年多くの学員が入学し、田中正孝（元代表取締役専務）氏をはじめ幹部行員も多い。その他、法曹界、マスコミ、県警などにもトップ級の学員がいた。津地方裁判所所長、津地方検察庁検事正、警察本部長、朝日新聞社支局長、三重労働監督署長、NHK津放送局長など多士済々であった。
対外的な活動にも触れておきたい。

昭和三〇年代後半から昭和四〇年代の頃は在学生がよく私を訪ねてきて音楽会や弁論大会などを開催するので学員会に協力して欲しい旨の申し出があり、動員や広告協賛には出来る限りの応援をした。また、中央大学の理事長が渋谷健一（十條製紙社長、三重県出身）氏の時には大学との関係も深まった。

学員会三重支部創立五〇周年記念式典はブラザ洞津であり、葛西聖司学員（NHKアナウンサー）に講演をしてもらい、一〇〇名を超える学員が参加した。大学関係者からは全国的にも珍しい充実した式典であったと、高い評価を頂いた。

このように先輩学員の長年に亘るご尽力とご配慮があったことを忘れてはならない。田村憲司（前支部長）氏には一六年前にわたり支部長としてご尽力いただいた。

今後は小川益司（現支部長）氏をはじめ新執行部のリーダーシップのもと更なる三重支部の発展を期待するものである。

フルスイング 中大野球部

県庁白門会

昭和六三年卒 稲地 純

三年ほど前に久々に母校を訪ねる機会を得た。その前の訪問は総合政策学部が設立された後くらいだったか。卒業した後の母校とは縁遠くなつてしまつたのは寂しいが、嘗て入学後高幡不動駅付近に住むことになった私は、あまりのうら寂しさに半年ほどで引越してしまつた。そこが今や三階建ての駅舎。そこからは多摩モノレールが発し、開発でかつての下宿アパートの位置さえも解らなくなつてしまつたくらい洒落た街に変貌したこと感慨を禁じ得なかつた。

母校の多摩キャンパスにこそ足は遠のいていたが、一年生時に体育実技で、「くるみクラブ」の主宰であられた桑原寛樹先生と出合い、その後同好会を結成して曲がりなりに四年間ラグビーを続けていた私は、卒業後も秩父宮ラグビー場と、野球部に友人がいた関係で神宮球場には母校の応援に毎年出か

けることにしている。

ラグビー部の最近の低迷ぶりは、毎年のようにリーグ戦二部落ちの心配をさせつつも何とか一部に踏みとどまっている状態であるが、昨年ようやく専用グラウンドが芝生張りに整備されて練習環境が整った。大学選手権出場を目指してまもなく今シーズンが開幕する。

野球部は最近、特に巨人の主力として出身選手が活躍しており、応援のし甲斐もあるところだが、「戦国東都」と称される激戦区でのシーズンが今年も九月五日に開幕した。上位校の実力は拮抗しており、下手をすればまたも二部落ちの可能性さえある。

中大野球部は、私が在学中の昭和五九年に東都二部に降格、入替戦の相手は青山学院。思い出すのは応援部の諸君で、「青学」ごときに負けるわけにはいかん」と息巻き、神宮球場への応援動員に必死になっていたが、二敗を喫しあえなく敗退。

我が中大野球部は後の昭和六三年から平成元年までの六シーズン、一部に復帰したがその後は長期に渡って二部に低迷し、平成一一年に阿部慎之助（現：巨人）を擁して一部に再び咲くまで実に一一年が経過していた。阿部慎之助は、巨人と西部の争奪戦となったが、逆指名で巨人に入団、その後の活躍は皆さんご存じのとおり。

阿部の卒業後、亀井義行（現：巨人）は一年生から四番を打ち、「東都のイチロー」と呼ばれるほどの活躍を見せた。亀井が四年生であった平成十六年秋、中大は実に二五年ぶりにリーグ優勝を果たす。今年、亀井は巨人の五番打者として活躍中。

この時のエースは三年生の会田有志（現：巨人）だったが、翌平成一七年には打線の不調が続きました。中大は二部に降格。会田は好投手のもの打線の援護がなく、いつもスタンドからの我々の応援は「頑張れ会田」ばかりであった。

会田は巨人に入団後の平成一九年四月、横浜戦で勝利投手となり、同時に史上初の一軍親子勝利投手となっている。（父：照夫氏は元ヤクルト投手）中大が現在の一部に再び咲いたのは、昨年の春期リーグ戦で二部優勝し、入

替戦に勝利して後の秋期から。監督は往年の完全試合投手である高橋善正氏で、大学創立一二五周年に花を添えるべく、大学日本一を目指して奮戦中である。

今シーズン、我が中大野球部は、澤村拓一と山崎雄飛のダブルエースを有し、当然のリーグ優勝を狙う。特に澤村拓一は百五十キロ超の速球投手で、日米大学野球選手権でも先発投手となっている。

水泳部での思い出

百五白門会

平成一八年卒 武市 昌輝

中央大学学員会三重支部六〇周年、誠におめでとうございます。

私は平成十八年に経済学部経済学科を卒業し、現在は百五銀行に勤務しています。諸先輩の方々に差し置いて記念号に寄稿させて頂く機会をいただいたので、私の水泳部時代の思い出を綴らせて頂きます。

私は体育連盟水泳部に所属し、水泳中心の学生生活でしたので、大学時代を振り返ると水泳のことばかりが思い出されます。

水泳部は全寮制で、他の部活と共に南寮で共同生活をしていました。二月末に高校を卒業した三日後にこの南寮に入寮しましたが、入寮当時の記憶は今でも鮮明に覚えています。水泳部では、二段ベッドが二組の各学年一名ずつで、四名一室で生活しています。寝食を共にし、「コミュニケーションをチーム全体で取れるように」という理由ですが、特に南寮では「立ち風呂」が名物といわれていました。立ち風呂とは、文字通り、湯船に立って入るお風呂のことです。南寮には、三〇〇くらいの体育会の部員が六〇〇名ほど寝起きしており、あまりの人数なので、

そもそも湯船が一メートル五〇センチくらいの深さがあり、座って湯船で寛ぐことができないのです。プールの中に立っているようなもので、いっぺんに二〇人ほどが入ることができました。入学当時、中央大学は日本学生選手

権において、男子総合優勝八連覇中と日本一のチームとして他大学と競い合っていました。そして在学時には、史上初となる一連覇を達成する等、私の水泳人生でこの日本学生選手権というのは一番思い入れがある大会でもありません。ちなみにそれまでの過去最高は日大の一〇連覇でした。

九月に行われる日本学生選手権は個人の結果を得点にし、各種目の得点を三日間積み重ね、総得点をチームの得点として戦います。そのため日本選手権以降は、個人目標の練習以外にもチームとしてまとまりを持つ雰囲気作り等を積極的にしています。チームとしてのまとまりが無ければ、メンタル面での不安が競技に影響し、決して勝つことができませんので、単独で行動することをよしとせず、行動・思考・感情すべてにおいてまとまりのあるチームとして振舞うことが伝統的に求められました。

他大学との差がなくなり毎年厳しくなる戦いでしたが、チーム一丸となり、みんなが一つの目標に向かって行動出来たことは、かけがえのない思い出となっています。

最終学年のとき、中央大学水泳部の連覇は途切れ、その後三年間優勝から遠ざかりましたが、昨年後輩たちが念願の優勝を奪還してくれました。良き伝統は、ずっと生き続けているものだと感じております。

在学四年間は、一日に一〇時間近くプールサイドにいる等、水泳に夢中になり、一つのことに夢中になれることは今後の人生でもないので、と思うくらいに夢を追いつけた四年間でした。嬉しい時、辛い時や苦しい時にもみんな支えあってくれた仲間の大切さを実感することが出来ました。そして、仲間の成功を自分のことのように喜べたことが私を一步大人にさせてくれた出来事であり、今後の人生に活かせる体験であったと思います。

大学時代を振り返ると、優勝杯でのビールの味や海外合宿と本当に充実した大学生活であったこと、メンタルトレーニングや栄養学についても最先端のコーチに指導を受け、恵まれた環境で水泳が出来ていたと改めて感じました。

陸上競技部での思い出

百五白門会

平成一八年卒 松永 康孝

中央大学学員会三重支部六〇周年、誠におめでとうございます。

私は平成一八年に商学部会計学科を卒業し、現在は百五銀行に勤務しております。諸先輩の方々に差し置いて記念号に寄稿させて頂くことのために感じますが、今回は百五白門会の池田会長（大阪支店長）から頂戴した大変光栄な機会に甘え、大学時代の思い出を寄稿させて頂きたいと思っております。

私の大学生活は陸上競技部での活動が中心でした。大学生活を振り返ると、寮での共同生活、多摩校舎のグラウンド、練習、合宿、試合、飲み会、麻雀等、陸上競技部での出来事が次々に思い出されます。陸上競技部には約八〇名の部員が所属していましたが、ほとんどの部員が南平の寮で生活をしていました。寮生活は基本的に各部屋四人の相部屋（四年生から一年生まで各学年一名ずつ）となっており、少子化が進行し大学全入時代と言われる現代においては考えにくい生活環境でした。さらに、下級生には寮生活での諸々の雑用もあり、大変なところへ来てしまったと覚悟を決めたことを記憶しています。

寮生活ではチームメイトと一緒に過ごす時間が多くなるため、良いところばかりではなく、そうではない所も見えてきます。不満に思うこともありましたが、考え方の違い等で対立することもありました。しかしながら、全員が遠慮することなく本気で付き合えたこと、そのような中で自分が気付いていなかった自身の性格、長所、短所等を知ることが出来たのはいい経験でした。全国各地から集まり、共に過ごしたチームメイトとの絆は一生続いていると思っております。

私は短距離の選手として一〇〇M、二〇〇M、四〇〇Mリレーを中心に競技をしていました。強豪であった早稲田大学、部員数の多い体育大学等と競い合ったことをよく覚えております。個人的には、U二〇の日本代表として出場した、アジアジュニア選手権の四〇〇リレーに優勝したことが一番の思い出です。当時リレーを組んだ高平選手（順天堂大卒）は、オリンピックや世界選手権で活躍しており、テレビで見ると当時のことを懐かしく思い出します。

陸上競技というものに本気で取り組めた四年間の経験は今後の人生に活かせる財産だと思っています。陸上競技部は箱根駅伝最多優勝回数、最多出場回数等の実績を持つ部。残念ながら、私は短距離の選手であり駅伝には出ていませんが、箱根駅伝等を目指す高い意識の部員が大勢いました。厳しい練習に耐え、生活面にも気をつかい、多くの期待に応えようと直向きに努力しているチームメイトの姿が、自分自信の甘さを気付かせてくれ、自分を変えるきっかけとなりました。

私自身は誇れるような成績は残せませんでした。高い目標を持ち努力した経験は今後の人生に活かせるものだと思います。

中央大学学員会三重支部の更なる発展をお祈り致します。

このたび、中央大学学員会三重支部が創立六〇周年を迎えられますことに、心からお祝い申し上げます。中央大学は、来年度創立一二五周年を迎えられるとお聞きしております。この歴史と伝統のある大学出身の皆様方は、県内の各界において活躍されていることと存じます。

近年の大学の躍進ぶりについて、数多ある大学において、学生の文武両道を含めた勤勉さ、学員会・父母会の充実ぶり、大学の教育・進路指導等のきめ細やかな教育方針等を思いますと、各種部活動の活躍、研究論文等に対する高い評価、資格取得者の増加、就職率の高さ、昨今の大学数の飽和状況、少子化の中で受験者数が増加している

表彰・叙勲

平成二一年四月、学員の田村憲司さんが経済・産業の振興に尽力されたご功績で県民功労賞を、小川益司さんが春の叙勲で地方自治功労者として瑞宝小綬章をそれぞれ授与されました。お二人の栄誉をお祝い申し上げます。

第四回全日本大学駅伝出場決定

一月一日、熱田神宮から伊勢神宮までの八区間一〇七キロを走る大学駅伝の関東地区選考会で五位に入り、本戦出場が決定しました。

今年も本学の優勝はおそらく期待できないが、今や晩秋の伊勢路の風物詩ともなっている全日本大学駅伝の学員の応援をお願いします。

編集後記

六二年振りの野党（民主党）の圧倒的な勝利による政権交代、新型インフルエンザの流行、東海大地震の前触れを懸念させる駿河湾を震源とした震度六の地震、失業率六％、長かった梅雨と冷夏等、社会経済、自然も変革や異常をきたしている。

久し振りの拙い学員会会報の発行ですが、これからは年二回発行して学員間の交流を図っていきたくないので、学員の寄稿をお願いします。ホームページも立ち上げましたのでご利用下さい。

編集者（文責）

小川・小林